

# 香港に停泊中の空母”遼寧”を見る

漢和防務評論 20171103(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

KDR は、香港を訪問した空母”遼寧”に乗艦して観察した結果を記事にしました。

予想通り、軍事アナリストとして観察した結果、様々な問題点が見られたようです。結論は、遼寧は、完全に研究及び訓練用で、実戦には使えないとのこと。中国の技術者も研究及び訓練専用である、と述べています。

ロシアの技術者は、ソ連空母ワリヤグの改装の結果は4乃至5年経てば分かる、と述べています。船体に歪みが出てくる可能性がある、とのこと。です。

平可夫

4000 枚に及ぶ中国海軍の空母遼寧、052C/D 型ミサイル護衛艦の写真及び録画映像を分析した結論は次の通り：この3種類の艦船の電子作戦、レーダー、武器系統は、055 と同じ系列にある。したがって 052C、052D ミサイル駆逐艦及び遼寧から 055 ミサイル巡洋艦に至るまで、全てのアンテナ、武器系統を詳細に研究する必要がある。全てを分析するには数ヶ月かかる。

まず最初に、遼寧艦の香港寄港の状況から見る：格納庫内外に J-15 艦載機が全部で 8 機搭載されていた。機番号は 120、121、122、119、113、114、116、111 である。中国中央テレビの報道によると：艦の長さ 306M、幅 74.4M、高さ 65.9M、甲板の面積 15500 平方M、通常排水量 54500 トン、満載排水量 60900 トン、最大速度 28KT である。基本的構造は当然ソ連の VAYARG (ワリヤグ) が原型であるが満載排水量は多少異なる。その主な理由は、武器系統が異なるからである。このほか VAYARG が当初搭載予定だった大量の艦対艦、艦対空ミサイルは搭載されておらず、その分軽くなっている。

現在、香港メディアが公開した編制を見ると：J-15 が 24 機、Z-18J 早期警戒機が 4 機、Z-18F 対潜ヘリが 8 機、Z-9C 搜索救難機が 4 機である。今回随行したヘリは：Z-18 が 2 機、Z-9C 371 搜索救難機が 1 機であった。Z-18F/J が随行していないことから未だ正式に配備されていないようだ。

このような状況から見ると、対潜能力が相当弱いことが分かる。満載排水量が 27000 トンの”いずも”級軽空母は、7 機の大型 SH-60K 対潜ヘリを搭載している。このことから、なぜロシア海軍が SU-33 を放棄し、MIG-29 を選択したか、その理由がわかる。大型の SU-33 は空母の貴重なスペースを占有し、しかもスキージャンプ型離艦方式は搭載燃料と武器に制限を受ける。したがって SU-33

の総合戦闘力と航続距離は中型の MIG-29 相当になる。

KDR は、1992 年 2 月、初めてロシア外交部を訪問した際、中国がワリヤークの改装にロシアの支援を求めていることを知った。当日ロシア外交部の官員は KDR に対し：中国側は改修の可能性を探っているようだ。国防部、対外情報局及び我々外交部は協議する必要がある、と述べた。これはソ連時代に踏襲された考え方である。

こんなことが可能なのか？KDR 総編集は信じられなかった。したがって報道はしなかった。1993 年のモスクワ航空ショーで、NEVSKOI 設計局、SUKHOI 設計局は、共同して KUZNESTOV 級空母の模型を展示した。これは当時、KDR 総編集が高度に関心を持った。なぜだ？輸出用か？KDR は中国が確かにワリヤークを欲しがっていることを感じ始めた。ロシアの軍事工業部門の現場では、中国のワリヤーク改装を支援することの可能性を検討した。その結果、70%しか完成していないワリヤークを簡易に改装するだけでも 1 億ドル以上かかる、と見た。（これは当時の価格で、現在の価格にすれば約 10 億ドル以上である）

KDR は直ちにモスクワ外交部を再度訪問した。中国担当係長の LOGVINOV は、KDR に対し：残念ながら、空母、核潜水艦、核兵器を含む戦略兵器の関連技術は、中国に輸出できない、と述べた。当時エリツインは、米露同盟を唱えていた。

その後、ある中国商人がウクライナに行ってワリヤークをカジノに改装する話を持ちかけた。KDR 総編集は当時：これは軍事目的の購入である。中国は最終的に訓練と研究に使うつもりだ、と報道した。これらの分析は、当時の西側及び日本のメディアには、完全に受け入れられていなかった。

2004 年、KDR 総編集は初めて大連でワリヤークを見た。改装作業は完全に軍用型であった。まず防錆塗料を塗り、その後逐次上層建築物を取り付けた。船室の内部に電灯を灯し、大量の廃棄された鋼鉄は明らかに船室から搬出されたものであった。

2011 年、ワリヤークは遼寧号に変身し、内部写真が公表された。KDR はこれらの写真を携行し NOVSKOI 設計局、オランダ、スペイン、フランス等の造船所を直接訪問し、設計師、技術者たちと懇談の機会を持った。ほぼ全ての専門家が：同船は RE-PROGRAMMING を行っている。すなわち船体内部を完全に複製している。中国はウクライナから部分的に原図を入手した。すなわち”ワリヤークの南方設計図”である。ロシアの専門家のある人は、少なくとも、SEMI-REPROGRAMMING である、と認めた。すなわち、現有の骨格をできるだけ保存しながら船室に対して再設計を行った、と。しかし徹底して再設計すれば、どうしてもやらねばならない事象が出てくる。それは改めて水槽実験を行う必要があることである。

しかし BAZAN 造船所の専門家は KDR に対し次のように説明した：“RE-PROGRAMMING のやり方は通常極めて煩雑である。新船を建造するよりも煩雑である。したがって我々はこのような契約を結びたくなかった。最近、我々は 16 世紀の海戦で使われた古船を RE-PROGRAMMING した。主として海上博物館にするためである。船室の構造を保存しつつ内部を新しくした。しかし莫大な金がかかった”、と。

これは単なる博物館となる船である。その時の取材で、ロシア造船所の専門家は KDR に対し次のように述べた：我々は、このような改装が成功したとは考えていない。状況を見るのに少なくとも 4 乃至 5 年観察する必要がある。その理由は鋼材の密度、品質が完全に異なるからである。また規格も異なり、化学反応が発生しないかどうか？これが最も重要である。一旦反応が発生すると、船体は変形し、傾斜し、最後は廃棄せざるを得なくなる。特に重量物を積載した場合である、と。

この点はよく理解できる：正常な人間の内蔵を全て移植した場合、いかなる症状が発生するか長期間観察する必要がある。

ワリヤグは 1988 年 12 月 4 日に進水式を行った。当時、ソ連共産党主管軍工の全ての高級官員が来場した。これはソ連の最後の盛り上りであったろう。2002 年 2 月、ワリヤグは中国の海域に到着した。如何なる護衛もなく、海上を漂流すること 14 年！

実際ワリヤグは水に浮かんでいたもので、現在まで 29 年間”就役”していたことになる。同時期に就役したロシア空母 KUZNETSOV は現在中期の改修段階に入っている。もし全て正常ならば、さらに 10 乃至 15 年就役させたい、とロシアは考えている。

本来難産であったワリヤグは、早期における通常の整備作業を完全に欠いている。KDR は、当時トルコでワリヤグの写真を詳細に研究したところ、船体に多くの錆が発生し、水線下の部分の防錆塗料が剥離脱落していた。

しかし 2002 年以後、中国造船工業界の消息筋は KDR に対し：相当先進的な高品質、高強度の鋼板が使われていたので、ソ連の鋼鉄工業には本当に感謝しなければならない。金属疲労もなかった、と述べた。これが中国海軍がワリヤグの改装を進めた主な理由である。しかし一旦、重量物を積載した場合、ワリヤグは金属疲労を起こさないか？密度、規格の異なる鋼板の溶接は化学反応を起こさないか？これは未知数である。中国はそれを知っているのか？

当然知っている！KDR がロシア専門家の結論を中国の造船専門家に伝えた時に、彼らは異口同音に次のように述べた：我々は当然知っている！したがって遼

寧艦は、最初から研究及び訓練専用になっている、と。

遼寧艦が香港に到着したとき、KDR 記者は上艦し、甲板、艦内に入り、海面から 360 度観察した。撮影した写真だけで 4000 枚以上になった。

結論その一：中国海軍は遼寧艦を出来るだけ軽くしようとしている。8 機の J-15 は如何なる武器も搭載していなかった。船室の内部に注目した。これが米国の空母であれば、各種の修理用機械で一杯のはずだ。米軍の艦載機は簡単な修理は艦内で行うことができる。遼寧艦の内部は空っぽだ。このことは J-15 は、平時、艦上では修理しないことを意味する。戦う空母ならば、相当不可解なことだ。

艦載機は 8 機だけであった。J-15 は全部で 20 乃至 21 機生産されているようだ。年産 2 乃至 3 機のみだ。このことは、少なくとも今回の遠洋航海では、全艦を上げて、全機の戦闘状態で訓練は行われなかったことを意味する。大量の艦対艦、艦対空ミサイルを装備してはいないので、船体は KUZNETSOV に比べ相当軽いはずだ。

エレベーターの昇降速度は米国空母に比べると遅い。このことは戦闘準備時間が長いことを意味する。当然速度は変えられる可能性はある。日本の”いずも”もエレベーター昇降速度は遅い。

香港の記者、マカオの記者は、遼寧艦の出す黒煙と水線下の防錆塗装の剥離を観察した。これらの観察は極めて精緻であった。KDR はすでに次のように報道している：遼寧艦と KUZNETSOV の動力系統は同様の問題がある、と。重油を燃やして不完全燃焼させれば当然黒煙が出る。体裁が悪いことに加え、環境を汚染し、煙突の温度は高くなり、赤外線の出が多くなる。ボイラー及び蒸気タービンの一部の部品はクリミアで生産される。ボイラー製造技術はすでにハルビンのボイラー工場に移転されている。ウクライナの国家武器装備輸出入総局は遼寧艦の改装を支援するため、中国担当局内部に空母担当グループを設立した。これは 2002 年以降のことである。KDR 記者は何度もキエフを訪問し取材している。

しかし少しだけ明確なことがある。KDR 記者が撮影した遼寧艦の 360 度の写真を詳細に観察すると：船体は端正であり、少しの傾斜も発生していないことだ。

防錆塗装剥離の問題については、KDR はすでに指摘した。大規模な剥離ではなく、現在の状況から見ると、基本的に正常と見られる。西側海軍の水上艦にも水線下に防錆塗装の剥離が見られる。

J-15 戦闘機を詳細に観察すると、多くの複合材料を使っているようだ。例えば尾翼である。説明書に明確に書いてある：” J-15 は中国が自力開発した！”と。

防空兵器は、HQ-10 の他に、730 速射砲がある。深水ロケット弾は主として魚雷用のデコイに使われる。ジャミングロケットには 2 種類あるようだ。それぞれがロシアの血統を引き継いでいる。

全体的に見て、研究及び訓練艦としては、遼寧は需要を満たしているようだ。しかし実戦に投入した場合、一連の構造上の問題や先天的に欠けている問題が即刻出現する可能性が極めて高い。KUZNETSOV が地中海からシリア戦争に参加した状況を見ると、多くの問題があることが分かる。

以上